

上海辞書出版社《唐詩鑑賞辞典》訳注稿

— 李商隱篇 (15) —

門 脇 廣 文

Commentary on the Four Poems of Li Shang-yin
in the *Tang-shi jian-shang ci-dian* (Dictionary for
the Appreciation of the Tang Poems. Published by
the Shang-hai Dictionary publication Company)
— A Draft Translation with Annotations.

KADOWAKI Hirofumi

〔目 次〕

はじめに

[57]	日日	劉学鍇
[58]	龍池	劉学鍇
[59]	涙	王思宇
[60]	流鶯	劉学鍇

はじめに

昨年度（2006年度）にひきつづき、上海辞書出版社《唐詩鑑賞辞典》所収の李商隱詩についての賞析文の訳注稿四篇を公表する。現在のメンバーは大東文化大学文学部非常勤講師の三枝秀子、学部卒業生の関久美子（現在、東京学芸大学教育学部非常勤講師）、後藤庸介、大学院博士課程後期課程3年の宮下聖俊、秋谷幸治、2年の鈴木拓也、博士課程前期課程2年の葉山恭江、1年の利田道隆、山内良太、書道学専攻博士後期課程2年の藤森大雅、1年の金周會、研究生の高橋由利子、前期課程2年の氏家真、高橋奈々、平井宏美、梅田悠希、そして私（門脇）の17名である。今回の担当者は次の通り。

[57]	日日	石川優子 + 三枝秀子
[58]	龍池	後藤庸介 + 鈴木拓也
[59]	涙	後藤庸介 + 宮下聖俊

[60] 流鶯

藤森大雅・氏家真・高橋由利子

平井宏美・高橋奈々・梅田悠希

金周會・関久美子

日 日	日 日
日 日 春 光 闘 日 光	日日に春光 日光を闘はし
山 城 斜 路 杏 花 香	山城の斜路 杏花香し
幾 時 心 緒 渾 無 事	幾時ぞ 心緒 渾て事無く
得 及 游 絲 百 尺 長	游絲の百尺の長きに及ぶを得んや

1

李商隱は日常生活の中の、何気ない詩的情趣や所感を表現することに長けていた。この詩でも、描いているのは美しい春の景色によって引き起こされた言い表しがたい感情である。「日日」という題を「春光」とするものもある⁽¹⁾。

第一句では、表現と内容ともにやや奇抜に見える。「春光」とは、春のあでやかで生命力に富んだ情景を広く指す。そして春の美しい日の光は、もとよりあらゆる自然の情景に鮮やかな彩りと、活発な生命力をもたらす動力と源である。「春光 日光を闘はす」というのは、なかなか理解できそうにない。ただ、美しい陽光にあまねく照らされた、一面のあでやかな春の景色に対する詩人の特別な印象は、「闘」の字を借りてまさに生き生きと描き出されているのである。太陽が中^{なか}空^{ぞら}に輝くこと、春の景色が鮮やかなことは、詩人にとってちょうど春景色と日光とが美を競っているかのように思えたのだろう。「闘」の字を付すことにより、互いに競い合う姿、勢いを増すようす、そして天地に満ち溢れた活気ある雰囲気^{ふんいき}のすべてを表現している。

李商隱は〈霜月〉詩⁽²⁾で「青女 素娥^{とも} 俱に冷に耐え、月中 霜里 嬋娟を闘はす」と言っている。秋の夜、霜と月が互いに輝くさまを、霜と月の女神が美しさを競っていると想像したのである。ここで表現されている境地は「春光 日光を闘はす」とは異なるものの、「闘」字の表現上の効果は、〈日日〉と同様に素晴らしい。だが、「春光 日光を闘はす」には何らかの、もう一つの含みがあるようである。「日光」とは、美しい春の陽光を指すとともに、過ぎゆく時間の意をも兼ねている。目の前の、この鮮やかで絢爛たる「春光」は、日々時間の速度とも競っており、この美しいときが消えてしまう前に、そのすべての美しさを現し出そうとしているかのようなようである。この「『春光』と時間がその速度を競っている」という含みには、それ自体に美しい季節が移ろいやすいことへの微かな哀しみが含まれており、次の句に詠まれている、情緒が乱れて安らかでないであろうことを暗に思い起こさせる。

第二句では春の景色を実際に描写しつつ、かすかに心情を込めている。山間^{やまあい}のまちへ続く坂道のかたわらには、杏の花が今を盛りと咲いている。うるわしい陽光に照らされ、芳香をあたりに漂わせている。杏の花には、花が枝に密集して咲く特徴があり、春の景色の鮮やかさを最もよくあらわすことができる。しかし遠くから望み見ると、この一面に密集して咲く花は白っぽく見えてしまうのである。そしてこうした色合いが、春の日の言いようのない哀しみを誘発しやすくもする。だから「山城の斜路 杏花香^{かんば}し」という情景描写の向こうに見えるのは、鮮やかな春の景色に対する単なる純然たる陶醉ではなく、言い表しがたい、乱れて穏やかでない、やるせない心情が、そこには含まれているのである。

第三、四句では、こうした複雑で微妙な思いから一步進んで、「心緒渾て事無く」という願望を引き出す。それはつまり「我が心がこの千々に乱れた状態から抜け出し、長くのびた游絲のごとく自由になれるのはいつのことか」ということである。「游絲⁽³⁾」とは春の日、晴れた空に漂う細い糸のようなもののことである。春に特有の風景として、昔から多くの詩人に繰り返し詠まれてきた。例えば「百尺の游絲 争って樹を繞る（盧照隣〈長安古意〉⁽⁴⁾）」、「落花 游絲 白日静かなり（杜甫〈題省中壁〉⁽⁵⁾）」などである。「游絲」の語を用いることで、活気に満ちた雰囲気を引き立たせたり、静かな境地を際立たせたりしている。だが、この〈日日〉のような比喩に用いたのは李商隱の独創である。

錢鍾書氏が「曲喩」という修辞法について述べた折り、

（我が国の詩人では）李商隱が最もこの曲喩にすぐれており、字数は多くないけれども、風格と趣は特に深遠である。……「幾時心緒渾無事 得及游絲百尺長」の句では、「緒」の字を付すことで、百尺の長さの絲という意味とも関わっていく。《談芸錄》⁽⁶⁾

と指摘している。

「心緒」とは、人の気持ちについての抽象的な概念のことである。「心緒渾て事無く」という境地を、そのまま表現するのはとても難しい。詩人は「緒」の字が「いと」の意味を含むことを利用して、抽象的な「心緒^{こころ}」を頭の中でイメージ化し、形のある「絲緒^{いと}」とした。そして「絲緒」から具体的な「游絲」をさらに引き出したのである。このように次々と意味が派生していくと、喩えとして用いているものは、喩えられているものから隔たってしまうかのようだ。だが、読んでみるとむしろ微妙なところまで表現し尽くされているように感じる。その原因は、この晴れた空にゆらゆらと漂う百尺もの「游絲」が、「心緒渾て事無」いときの安らかでゆったりとした気持ちを具体的に表現しているだけでなく、心の中の空っぽになったような状態や、心が

うつろで抛りどころないという微妙な感覚をもありありと表現していることにある。さらにこの「游絲百尺長」という比喻を加えることで、眼前の景色から言葉を自在に引き出してもみせている。それゆえに、自然に一体となって、情と境とが絶妙に合わさっているようにいっそう見えるのである。「幾時」と「得及」は、詩人の「心緒渾て事無」きことへの願望を際立たせる。翻せば、現在の乱れて安らかでない心情を際立たせてもいるのである。

4

詩の中の個々の詩句が、ふと感じた微妙なことを表現することは、珍しくない。けれども詩全体をこうした所感を表現することだけに使うことは、多くは見られない。それゆえにこの詩の表現方法はしばしば人々に間違った解釈や詩人の現実に照らし合わせた解釈をさせるのである。たとえばこの詩に対して、注釈者たちが「虚しく春景色が過ぎていく」⁽⁷⁾「仕官することに倦み疲れる」⁽⁸⁾といった解釈をしているのがそれである。しかしながら、このような解釈をすると、詩全体の言葉の妙味が全て失われてしまうのである。

劉学鍔（石川優子訳）

-
- (1)題を「春光」とするものもある：《李商隱詩歌集解》によると、朱鶴齡の《李義山詩集箋注》では「春日」に、《唐人萬首絶句》では「春光」と題するものがある。
- (2)〈霜月〉詩：〈上海辞書出版社《唐詩鑑賞辞典》訳注稿－李商隱篇(1)－〉（《大東文化大学紀要》第31号〈人文科学〉大東文化大学発行・平成5年3月）の〔3〕を参照。
- (3)游絲：游絲の用例はここで取り上げられている盧照隣、杜甫以外に沈約に「游絲映空転」というものもある。
- (4)盧照隣〈長安古意〉：全文掲載は省略。「百尺游絲争繞樹」の尺を「百丈游絲争繞樹」と「丈」に作るものもある。
- (5)杜甫〈題省中壁〉：掖垣竹埤梧十尋、洞門对霽常陰陰。落花遊絲白日静、鳴鳩乳燕青春深。腐儒衰晚謬通籍、退食遲迴違寸心。衰職曾無一字補、許身愧比双南金。
- (6)錢鐘書《談芸錄》：該当部分の原文は「而要以玉溪為最擅此、著墨無多、神韻特遠。（中略）幾時心緒渾無事、得及游糸百尺長、執著緒字、双関出百尺長糸也。」「為最」が劉氏の引用文では「最為」になっていた。
- (7)「虚しく春景色が過ぎていく」：原文「虚度春光」。《李商隱詩歌集解》によると、屈復の言葉として「言虚度春光也」とある。
- (8)「仕官することに倦み疲れる」：原文「客子倦遊」。《李商隱詩歌集解》によると、馮浩の言葉として「客子倦遊、情味渺然」とある。

龍 池						龍 池					
龍	池	賜	酒	徹	雲	屏	龍池に酒を賜ひて	雲屏	を	徹 ^{たか}	くし
羯	鼓	声	高	衆	樂	停	羯鼓 ^{かっこ} 声高くして	衆樂 ^や	を	停	む
夜	半	宴	帰	宮	漏	永	夜半宴より帰れば	宮漏 ^{きゅうろう}	を	永	く
薛	王	沈	醉	寿	王	醒	薛王 ^{せつおう} 酔ひに沈み	寿王 ^{じゅうおう}	を	醒	む

玄宗と楊貴妃の愛は、生死にかかわらず変わることのない愛のモデルとして、白居易⁽¹⁾によって〈長恨歌〉⁽²⁾の中で詠われている。しかし史実に基づいていえば、もともとは父が子の妻をむりやり奪うというスキャンダルがその発端である。

楊玉環は楊玄琰の娘で、開元二十三年（735）に寿王（玄宗の子、李瑁）の妃となった。しかし楊玉環は玄宗に気に入られ、まず道士として過ごしたのち宮中に送られ、天宝四載（745）正式に貴妃となった。李瑁は別に韋昭訓の娘を妃として娶った。⁽³⁾ このみだらな行いは、恐らく中晩唐の詩人がみな知っている事実であったろう。だが、詩歌に表したのは、李商隱のこの〈龍池〉と、もう一首〈驪山有感〉⁽⁴⁾だけである。

その原因は概ね二つの理由による。一つ目は、事件が当時の皇帝による近親相姦という悪行に関するものだからである。この悪行を批判することは、一般的な政治に関する批判にくらべ、タブーによりふれやすいため、十分に肝が据わっていないと、詩に詠むことなどできない。二つ目は、事件がわいせつな内容に及んでいたためである。正面から取り上げたのでは、ともすれば醜い部分を並べたてるだけで終わってしまうおそれがある。

この詩の良いところは、史実に関する鋭く大胆な暴露と、含みを持たせた描写とがちょうどよく融合している点である。また、構想上の目立った特徴は、正面からの描写をさけている点である。宮廷の日常生活の情景を選んで、玄宗に対する鋭い風刺を側面から加えているのである。

1

前半の二句（龍池賜酒徹雲屏、羯鼓声高衆樂停）は、「龍池」で行われた酒宴の様子を描写している。「龍池」は興慶宮の中にあり、玄宗と皇族、皇后や皇妃が宴を楽しんだ場所である。「龍池に酒を賜う」とは、この宴席が玄宗により設けられたものであり、宮中で行われた内々の宴であることを表している。参加者には、玄宗や皇族のほか、かつては寿王の妃で今は宮中で皇帝の寵愛を受けている楊貴妃も、当然含まれていた。「龍池」のほとりに「雲を描いたついたて（雲屏）」が高々と並んでいたというのは、宴会がにぎやかで、豪奢であることを示している。また、宴席に楽器の演奏は欠かせないものだが、そこでは通常の楽器がその音色を競うことはなく、

「多くの楽器（衆楽）」は皆停まり、「羯鼓」が高らかに演奏されていた。この具体的な描写は大変深い意味がある。

「羯鼓」はもともと羯族発祥の楽器で、形状は漆を入れる桶のようであり、二本のバチで叩く。その音は張りつめた高い音で、空の彼方へ突き抜けるように鳴り響く。唐の玄宗は特に羯鼓を好んだ。ある時玄宗が琴を聞いていると、演奏が終わらないうちに琴の奏者を怒鳴りつけ「早く花奴（汝陽王李璣の幼名）に羯鼓を持って来させよ、その耳障りなものをさげよ。」と言ったという。⁽⁵⁾

「羯鼓の音だけが高らかに響き、ほかの楽器はすべて鳴りやんだ（羯鼓声高衆楽停）」という具体的な表現を通して、読者は封建時代の帝王がすべてを圧倒し支配するといった、専制的な暴威を感じ取ることができるのである。皇帝の意志や欲望は、誰も逆らうことができないものである。この二句では、玄宗が息子の嫁を奪うという醜いふるまいについては一言も触れていない。だが、この二句で歌われている宴席での出来事のようなことは、専制的な皇帝の行動論理にぴったり符合すると感じさせるのである。それゆえ、この二句に描かれた具体的な描写は、ただ純粹な写実であるだけでなく、ある種の象徴性や暗示の色合いをも帯びるようになったのである。

2

後半の二句（夜半宴歸宮漏永、薛王沈醉寿王醒）は、宴が終わって眠るために帰宅するという場面に転じて、薛王と寿王の二人が一人は酔いつぶれ、一人は醒めている様子を描写している。

玄宗の弟の李業は薛王に封じられたが、開元二十二年に没したため、その子の李瑁（「瑁」字をあてるものもある）が、王位を継いで薛王になった。⁽⁶⁾ 詩の中に描かれている状況にもとづけば「薛王」は、二代目の方を当然指していなければならない。だが薛王が実際に誰なのか、事実にはこだわって詳しく調べるに及ばない。なぜなら詩人が、たまたま「薛王」という名前をそこに当てはめたにすぎないからである。

「薛王」は心の悩みなどなく、宴席では当然思う存分酒を飲んだはずである。宴が終わって帰ってくると、すぐに酔って眠り込んでしまった。しかし「寿王」は妻を奪われたというつらさを味わっており、日頃から鬱積した思いが胸の中にあった。そこへ今日宴席で、かつて自分の屋敷とともに過ごした女性が、いまや宮中の新たな寵姫となっているのを目撃したのだから、寿王はさらに強い精神的なショックを受けたに違いない。そういうわけで、寿王は宴が終わって帰ってきても、いつまでも時を刻み続ける「水時計（宮漏）」の側に寄り添い一晩中眠らなかったのは当然である。

詩人は「寿王」を描くのに、ただ「醒」という一文字を用いているだけである。だがそこに込められている意味は、極めて豊かである。この一字には、回想、別れた妻への思い、胸の内にある苦しみ、つもりつもった怒り、恥辱と言った感情がある。さらには、内なる感情をはき出す

べがないという、強烈な悲憤が込められているのである。

この二句はまるで、対比のはっきりとしたクローズアップシーンのようなものである。そしてこの二句によって、寿王の内心にある苦しみと怒りが、我々の目の前に提示されているのである。このような描写そのものが、玄宗に対する痛烈な非難なのである。

3

エンゲルス⁽⁷⁾は「私は、特定の思想性のある『傾向詩』自体には、決して反対しない。…しかし作品の傾向というものは、当然場面や物語の筋の中からおのずと発露されるべきもので、わざわざそれを指摘するべきではないと考える」と言っている。(〈ミンナ・カウツキーへの手紙〉)⁽⁸⁾

〈龍池〉はまさしく作品の傾向が場面や物語の筋から自然に発露した例である。全編を通じて一言も直接非難する言葉はなく、正面から玄宗のみだらな行為を述べてもいない。だが、ありきたりな具体的描写や情景描写の助けを借りて、正面から描写したり、直接非難するよりもむしろより強烈な芸術的効果を得ている。この芸術的な教訓は手本にすべきものである。

劉学鍔（後藤庸介訳）

(1)白居易：〈上海辞書出版社《唐詩鑑賞辞典》訳注稿－李商隱篇(9)－〉(《大東文化大学紀要》第40号〈人文科学〉大東文化大学発行・平成14年3月31日)の[32]〈碧城三首〉の注(19)を参照。

(2)〈長恨歌〉：七言百二十句からなる長篇の叙事詩で、玄宗と楊貴妃のことを詠じている。唐の陳鴻の〈長恨歌伝〉によれば、元和元年(806年)白居易が藍屋県尉をしていたときの作とされている。

(3)玄宗が息子の妃を奪ったことについて、《旧唐書》列伝卷五十一 第一后妃上玄宗楊貴妃伝に「開元初、武惠妃特承寵遇、故王皇后廢黜。二十四年惠妃薨、帝悼惜久之、後庭数千、無可意者。或奏玄琰女姿色冠代、宜蒙召見。時妃衣道士服、號曰太真。既進見、玄宗大悅。」とある。これには、玄宗が女道士姿の楊貴妃に会ったことは記述されている。また、《新唐書》卷七十六列伝第一后妃楊貴妃伝に「始為寿王妃。開元二十四年、武惠妃薨、後廷無当帝意者。或言妃姿質天挺、宜充掖廷、遂召内禁中、異之、即為自出妃意者、丐籍女官、號「太真」、更為寿王聘韋詵訓女、而太真得幸。」とある。《新唐書》には、劉学鍔氏が述べる内容がほぼそのまま確認できる。

(4)〈驪山有感〉：詩の全文は以下の通り。

驪岫飛泉泛暖香	れいしゅうの飛泉 暖香 ひろく
九龍呵護玉蓮房	九龍はかこへす玉蓮房

平明毎幸長生殿

平明毎^{つね}に長生殿^{みゆき}に幸するも

不従金輿惟寿王

金輿に従はざるは^た惟だ寿王のみ

(5)宋の王讜撰《唐語林》卷四豪爽に「明皇性俊邁不好琴。曾聽琴正弄未畢叱琴者曰、待詔出謂内官曰、速令花奴將羯鼓來為我解穢。」とある。

(6)《旧唐書》列伝卷九十五第四十五睿宗諸子惠宣太子業伝に「睿宗即位、進封薛王、加封滿一千戸、拜秘書監、兼右羽林大將軍。」とある。また同じく惠宣太子業伝に「瑗樂安郡王、瑒宗正卿、滎陽郡王、瑒封嗣薛王、珍嗣岐王。」とある。

(7)エンゲルス：フリードリヒ・エンゲルス (Friedrich Engels, 1820年11月28日－1895年8月5日) ドイツ出身のジャーナリスト、共産主義者。カール・マルクスと協力して科学的社会主義の世界観を構築、労働者階級の歴史的使命を明らかにした。

(8)〈ミンナ・カウツキーへの手紙〉：ミンナ・カウツキー (Minna Kautsky, 1837-1912) オーストリアの女流作家、社会民主主義者。この手紙は、1885年にロンドンにいたエンゲルスが、ウィーンのカウツキーに宛てたもの。全文に対する中国語訳は、《馬克思恩格斯全集》第36卷 中共中央 馬克思列寧 恩格斯大林 著作編訳局 訳 新華書店1974に収められている。また邦訳については、《マルクス＝エンゲルス全集》第36卷 大内兵衛・細川嘉六 監訳 大月書店1975で確認することができる。

涙							涙													
永	巷	長	年	怨	綺	羅	永	巷	長	年	綺	羅	を	怨	み					
離	情	終	日	思	風	波	離	情	終	日	風	波	を	思	ふ					
湘	江	竹	上	痕	無	限	湘	江	の	竹	上	痕	限	り	無	く				
峴	首	碑	前	灑	幾	多	峴	首	の	碑	前	灑 ^{そそ}	ぎ	し	こ	と	幾	多	ぞ	
人	去	紫	台	秋	入	塞	人	は	紫	台	を	去	り	て	秋	に	塞	に	入	り
兵	残	楚	帳	夜	聞	歌	兵	は	楚	帳	に	残 ^つ	き	て	夜	に	歌	を	聞	く
朝	来	灞	水 ⁽¹⁾	橋	辺	問	朝	来	灞	水	の	橋	辺	に	問	へ	ば			
未	抵	青	袍	送	玉	珂 ⁽²⁾	未	だ	青	袍	の	玉	珂	を	送	る	に	抵 ^{およ}	ば	ず

これは自ら身の上を悲しんだ七言律詩である。この詩が詠まれた具体的な年代を確定することは難しい。注釈者の中には、この詩は大中二年（848）の冬に李徳裕に貶められたために詠まれたと考えて、詩に用いられている言葉を無理に李徳裕と李商隠との話に結びつけている者がいるが、こじつけであると言わざるを得ない。⁽³⁾

1

この詩の描写の方法は、大変趣のあるものである。第一句から第六句では、一つの句で一つの事象が描かれている。

第一句は宮女が寵愛を失うところを描いている。「永巷」は漢の宮廷で罪を犯した女官を幽閉する場所である。「綺羅を怨」むというのは、「綺羅（あや絹とうす絹）」（宮女を指す）の怨みのことである。

第二句は別れを描いている。「風波を思ふ」とは、家にいるものが、苦労を重ねて旅ゆくものを思うことを意味している。それと同時に、苦しい旅の途中にあるものが家に残したもののことを思うことをも意味している。

第三句は娥皇と女英の話を描いている。舜は南方を視察したときに、蒼梧という地で亡くなった。舜の二人の妃である娥皇と女英はいそいで南方にかけつけ、湘江のほとりで悲嘆にくれた。二人の悲しみの涙は竹の上に落ちて、その痕が点々と残ったと伝えられている。⁽⁴⁾

第四句は羊祜の事を描いている。西晋の時、羊祜は襄陽を治めていたが、仁政をしいていたのので、死後民衆は峴山に廟を建立し碑をたて、時を決めてこれを祭った。その碑を見て涙を流さない者はいなかった。（《晋書》羊祜伝に見える）⁽⁵⁾

第五句は王昭君のことを描いている。すなわち杜甫の〈詠懷古跡〉五首・其の三「一たび紫台

を去りて朔漠連なる」⁽⁶⁾の句と同じ意味である。「紫台」というのは、紫宮つまり宮廷のことである。漢の元帝は匈奴と親戚関係を結び、その際王昭君が匈奴に嫁がされた。(《漢書》匈奴伝に見える)

第六句は楚の霸王項羽が戦に敗れたときのことを描いている。項羽は劉邦軍に垓下で包囲され、兵の数は減り食料もつきた。「夜間に漢軍の兵がみな楚の歌を歌っているのを聞き、驚いて起きあがり、とばりの中で酒を飲み、悲しみを歌に詠むと気持ちが高ぶり、はらはらと涙を流した。」(《漢書》項羽伝)⁽⁷⁾

2

この六つの出来事の状況は異なっていて、性質もそれぞれ違っている。しかし、共通点がひとつだけある。それは、どれもこの詩のタイトルである「涙」という文字を含んでいることである。第一句は寵愛を失った涙、第二句は別離の涙、第三句は死者を悼む涙、第四句は徳を偲んで流す涙、第五句は異国に身をおとしめていく涙、第六句は英雄の末路の涙である。六つの出来事、六種類の涙、これらの間には有機的な関係はまったくなく、大雑把に見たら、ただ史実を積み重ねているだけのように感じられる。

3

しかしながら、我々は最後の一聯までしっかり読みさえすれば、そうでないことに気づくはずである。最後の二句の意味はおよそ次のようである。

明け方に、私は灞橋のところにきて昼夜を問わずに流れていく河の水に尋ねてみてようやくわかった。今まで述べてきたこの世の中のすべての悲しみなど、貧寒の士が屈辱に耐えたり、貴人を送って行くつらさに比べればたいしたことではないのだと。なぜなら、貴人を送り迎えするのには笑顔を強いられる。これが才能と志のある人物にとって耐え難い苦痛でないはずがないではないか。それにこの苦痛の涙は胸の内では流すことができない。これは今まで述べてきた六種類の「涙」に勝るものではあるまいか。

詩はここにいたって、我々に突然はっきりと気づかさせる。この詩の構想は、きわめて斬新かつ独創的なものだったのだと。つまり、第一句から第六句はみな前置きであり、引き立て役であって、最後の一聯こそが本旨なのである。

程夢星は次のように述べている。

この詩は全体に「興」のスタイルを用いており、結びの一点に言いたいことが込められている。

また、陳帆は次のように言う。

まず後宮で幸せを願うことを詠み、次に旅人が家を離れることを詠んでいる。湘江と峴首は、生と死の悲しみを表現している。国境の外へ出て行くことや、楚の歌を聞くというのも、国を遠く離れた悲しみであり、天に滅ぼされるという悲しみである。これらはみな悲しことではある。しかし、私に言わせれば灞水の橋で青い長衣を着た貧乏学者が高官や貴人を見送り、その困窮した境遇を堪え忍ぶということには及ばない。これこそもっとも深い悲しみで涙すべき事ではないだろうか。前の句はすべてうわべだけの言葉であり、結句になってやっと本当に言いたいことが出てくる。

(程夢星と陳帆の言葉は、程夢星《重訂李義山詩集箋注》に見える)⁽⁸⁾

尾聯の締めくくりがあるからこそ、はじめて前の六つの事象が生きてくるのであり、前の六句は尾聯の引き立て役となるのである。

4

前の六句と結びの二句をつなぐ要となっているのは、末句の「未抵」の二文字である。この語が、前の部分の六種類の涙を、末句の涙との対比という一点に帰結させている。またそれだけでなく、前の六句のいろいろな種類の涙をすべてぬぐい去って、さらに青い衣を着た貧乏学者の心の底に眠る涙を際立たせてもいて、詩の主旨を余すところなく表現している。

李商隱は若い頃から「天地を回らさんと欲す」(〈安定城樓〉)⁽⁹⁾という政治に対する遠大な夢があったが、生涯幕僚のままその一生を終えた。貴官の列に身を置いて、送迎をしたりつきあいをしたりするのは、精神的に大変苦痛であった。この詩は、李商隱がその身の上を悲しんだ血の涙の結晶なのである。

王思宇(後藤庸介訳)

(1)【原注】灞水：長安の町の東。灞橋の北を経て、渭河に流入する。唐代では長安の人々はよくこの橋で送別をした。

(2)【原注】青袍：古代学者が着ていた衣服。詩の中では貧寒の士を指す。玉珂：貝でつくった馬の頭につける飾り物。詩の中では良馬に乗った高官と貴人を指す。

(3)【原注】馮浩《玉溪生詩集箋注》と張采田《玉溪生年譜會箋》に見える。

(4)漢の劉向《列女伝》に見える伝説。

(5)《晋書》卷三十四・羊祜伝に見える。

(6)杜甫〈詠懷古跡〉五首・其の三の領聯に「一去紫臺連朔漠、獨留青冢向黃昏」とある。

(7)《漢書》卷三十一・陳勝項籍伝の次の記述を節録したもの。「羽夜聞漢軍四面皆楚歌、乃驚曰『漢皆已得楚乎。是何楚人多也。』起飲帳中。有美人姓虞氏、常幸從。駿馬名騅、常騎。乃悲歌

慷慨、自為歌詩曰『力拔山兮氣蓋世、時不利兮騅不逝。騅不逝兮可奈何。虞兮虞兮奈若何。』歌數曲、美人和之。羽泣下數行、左右皆泣、莫能仰視。」

(8)程夢星「此篇全用興體、至結處一点正義便住。…」

陳帆「首言深宮望幸。次言羈客離家。湘江峴首、則生死之傷也。出塞楚歌、又絕域之悲、天亡之痛也。凡此皆傷心之事。然自我言之、豈灞水橋邊以青袍寒士而送玉珂貴客、窮途飲恨、尤極可悲而可涕乎。前皆假事為詞、落句方結出本旨」

(9)李商隱〈安定城樓〉の頸聯に「永憶江湖歸白髮、欲回天地入扁舟」とある。〈上海辭書出版社《唐詩鑑賞辭典》訳注稿－李商隱篇(13)－〉(《大東文化大学紀要》第44号〈人文科学〉大東文化大学発行・平成19年3月)の[55]を参照。

流 鶯							流 鶯						
流	鶯	漂	蕩	復	参	差	流	鶯	漂	蕩	復 ^{しんし}	参 ^{しんし}	差
度	陌	臨	流	不	自	持	^{みち} 陌を渡り		流れに	臨み	自	ら	持せず
巧	囀	豈	能	無	本	意	巧	囀	豈	能	く	本	意無からんや
良	辰	未	必	有	佳	期	良	辰	未	だ	必	ず	しも佳期有らず
風	朝	露	夜	陰	晴	裏	風	朝	露	夜	陰	晴 ^{うち}	裏
万	戸	千	門	開	閉	時	万	戸	千	門	開	閉	の時
曾	苦	傷	春	不	忍	聴	^{すなは} 曾 ^{はなは} ち苦だ	春を	傷み	聴く	を	忍	ばず
鳳	城	何	処	有	花	枝	鳳	城	何	れの	処	にか	花枝有らん

これは李商隠が自身の心中を物に託し、我が身の不遇を嘆じた詩である。詩の作られた年代を確定するのは難しいが、「漂蕩（あちこちをさすらう）」、「巧囀（美しいさえずり）」、「鳳城（都の美称）」といった内容が詩中に盛り込まれていることから、おそらく「遠く桂海従り、来たりて玉京に返（遠従桂海、来返玉京）」⁽¹⁾った後に作られたものであろう。

宣宗の大中三年（849）の春、李商隠は長安で京兆府の下級役人として臨時にとりたてられた⁽²⁾。

天官補吏府中趨 天官吏を補い府中趨り

玉骨瘦来無一把 玉骨瘦来して一把も無し

（吏部で選ばれて官吏となり、役所内を奔走しているうちに、

清廉高潔の面影もなくなり、すっかりやつれて果ててしまった）

〈偶成転韻七十二句贈四同舎〉⁽³⁾

李商隠はこのような詩句も残しているが、ここには彼の当時の生活や心境が反映されている。

1

「流鶯」とは、あちこちを転々とさすらい、定住の場所のない黄鶯（コウライウグイス）のことである。詩の冒頭の二句（流鶯漂蕩復参差、渡陌臨流不自持）では、「流」字を直接的に重ねて用いている。「参差」は、もともとは鳥が飛ぶときに翼を羽ばたかせている様子を形容することばだが、ここでは動詞のように用いられており、「翼を広げて飛ぶ」といった意味になる。つまり「漂蕩復た参差（漂蕩復参差）」とは、あちこちを散々さすらい転々としてきたあと、すぐにまた別の場所へと飛び立っていくことを意味する。二句目の「^{みち}陌を渡る（度陌）」と「流れに臨む（臨流）」は、ひたすら繰り返される移動の中で通る場所や羽を休める場所を表しており、一句目の「復」字を受けている。

では、「流鶯」がこのようにたえず「漂蕩（あちこちをさすらいこと）」を続け、飛び続けるのはいったいなぜか。また、いったいつまで、そしてどこまでさすらい続けるつもりなのだろうか。これに関して、詩人は直接的な説明は避け、「不自持（自分ではどうしようもない）」の三字で軽く受けるに止めている。だが、この三文字は、詩全体のキーワードであり、「流鶯」には自身の運命をコントロールするすべがまるでなく、あたかも見えない力に支配されているようだ、ということを示している。

「流鶯」の「漂蕩」を用い、幕府を転々とする自身の生活を喩えるのは、比較的ありふれた比喩表現である。ただ、この「不自持」の三字には、李商隱自身の特別な思いがとけ込んでいるのである。桂林から北へ帰る途上、李商隱は暗く沈んだ思いで、次のように嘆じている。

昔去真無奈　昔去ること　真に奈ともする無く

今還豈自知　今還ること　豈自ら知らんや

（かつて都を離れるときも、自分ではまったくどうすることもできなかったが、

今こうして都に帰ることになろうとは、どうして知る由などあっただろう。）

〈陸発荆南始至商洛〉

ここで言う「去ること真に奈ともする無し（去真無奈）」や「還ること豈自ら知らんや（還豈自知）」は、ちょうど「不自持」の内容を具体的に示した注釈のようである。「不自持」の三字は、「漂蕩復た参差」という詩人の悲劇的な身の上の背景にある社会的要因へと、読者の目を向けさせ、詩の世界を奥深くしているのである。

2

あちこちをさすらい転々するというのは、言わば「流鶯」の外面的な行動の特徴である。続く三・四句目では、さらに踏み込んで、「流鶯」のもうひとつの特徴である「巧囀（美しいさえずり）」の描写を通じ、その心の内の苦悶を述べている。

巧囀豈能無本意　巧囀　豈能く本意無からんや

良辰未必有佳期　良辰　未だ必ずしも佳期有らず

「流鶯」のあの滞ることのない美しい歌声の中には、麗しい春のこのよい季節に、我が身にも「春」が巡ってきて欲しいという、切実な願いが込められていることは明らかだ。しかしながら、鶯の「巧囀（美しいさえずり）」に込められた「本意（心の内の本当の思い）」が人に理解されることは、そもそもない。したがって、どんなに春のよい季節が巡ってこようとも、「佳期（よい時期）」の到来を待ち、自らの願いを実現することは不可能なのである。

「流鶯」の「漂蕩」が李商隱の「さすらえる人生」の象徴であるとすれば、「巧囀」は、李商隱の詩歌の美しさを生き生きと伝える喩えである。独特なのは、「美しいさえずり（巧囀）」を強調する中に、人からは理解されない「心の内（本意）」を託している点である。この「本意」は、

李商隱自身の理想や抱負とも、また李商隱が抱いている、政治の世界で自分を認めてくれる人物に巡りあうことへの期待とも受けとれる。

この聯は〈蟬〉⁽⁴⁾詩の頷聯によく似ている。ただ、〈蟬〉詩の「五更 疎にして断へんと欲し、一樹 碧にして情無し（五更疎欲断、一樹碧無情）」で強調されているのは、寂しく息も絶え絶えに鳴いているのに誰からも同情されないことであり、我が身の置かれている環境の冷酷さである。一方、この詩の「巧囀」の一聯で強調されているのは、美しいさえずりに込めた心の内を理解してもらえないことであり、世に「知音」のいないことへの嘆きなのである。

「豈能（どうして…だろうか、いや…だ）」と「未必（必ずしも…とは限らない）」は、いったん言い放ってから収まりをつける、あるいは緊張を持たせて緩めるといったニュアンスのことばである。李商隱の、人に理解されないというやりきれない気持ちや、よい時期が巡ってこないことへの深い悲しみを、これらのことばがそこはかとなく伝えており、流れるような美しさの中に、人を感動させる趣がある。

まさに、この一聯全体が、奥深い内容と婉曲な表現の融合体であると言うことができよう。

3

続く頸聯でも、前聯の「巧囀」を受けて、鶯が鳴く様子を描いている。

風朝露夜陰晴裏 風朝 露夜 陰晴の裏

萬戸千門開閉時 萬戸 千門 開閉の時

それは、「本意」が理解されることもなく、「佳期」が巡ってくることもない「流鶯」の、いつまでも止むことのない鳴き声であった。風が吹く朝であろうが露が降りる夜であろうが、晴れていようが曇っていようが、都中の家々の戸が開いている時であろうが或いは閉まっている時であろうが、「流鶯」は、どんな時でもどんな場所でもひたすら歌い続けるのである。その姿は、あたかも「本意」を人々に伝えようと必死になっているようであり、さらには、いつになるか見通しの立たない「佳期」の訪れを待っているかのようでもある。

この一聯は、「主語や述語を省略し、連用修飾語だけから」なる二つの句で構成されている。また、それぞれの句中の「風朝」と「露夜」、「陰」と「晴」、「万戸」と「千門」、「開」と「閉」とがいずれも対をなしている。このため、読めば、きちんと秩序だっていながら流れるように美しく、わかりやすくありながら深みもあるといった独特な味わいがある。

尾聯（曾苦傷春不忍聽、鳳城何処有花枝）では、李商隱自身のことに結びつけて、「春を傷む（傷春）」ということばの真の意味を明らかにしている。

「鳳城（都の美称）」は長安を表し、「花枝（花のついた枝）」は「流鶯」が棲とする場所を意味する。二句の意味はおおよそ次のとおりである。

自分はかつて傷春の情に苦しめられた。だから、春を傷んでずっと鳴き続ける流鶯の哀しい声を、これ以上聴くのは本当に忍びない。

とは言え、この広い長安の街で、流鶯が棲となる花の枝をみつけることなど果たしてできようか。

初唐の詩人の李義府⁽⁵⁾は、〈詠鳥〉⁽⁶⁾詩で次のように述べている。

上林多少樹　上林　多少の樹
不借一枝栖　借さず　一枝の栖

（御苑にはたくさんの木があるが、棲とする一本の枝も貸してもらえない。）

末句の「鳳城　何れの処にか花枝有らん（鳳城何処有花枝）」は、これをふまえたものである。

「春を傷む（傷春）」とは、「佳期」が巡ってこないことを悲しむことである。そして、「佳期」の到来が遠のいてはんやりとしていくにつれ、「春を傷む」気持ちはどんどん強まっていく。

麗しい春の日は、「傷春」の哀しい鳴き声とともに過ぎ去ろうとしている。だが、「流鶯」には行く春を留めるすべがないばかりか、しばしの間棲とする枝の一本もみつけることができないのだ。これは、杜鵑が血を吐きながら鳴くときのような、死ぬほど悲しい境地にすでに達していることを意味する。

李商隱は、「流鶯」の哀しい鳴き声を「聴くに忍びず（不忍聴）」と表現することで、自らの「傷春」の思い——志を遂げられないまま歳月が虚しく過ぎていくという精神的な苦悶を、鮮明に描き出している。

また、末句は、表向きは「流鶯」のことを言っているが、暗に自らを重ねてもいる。したがって、これを読むと、棲とする枝もない「流鶯」の境遇に詩人が心を寄せているようでもあるし、「流鶯」の哀しい鳴き声の中から詩人が聞き取った内容ともとれる。さらには、李商隱自身の心の声のようにも見える。その含意や措辞の細やかさ、味わい深さは、入神の域に達していると言えよう。

劉学鍇（藤森・氏家・高橋（由）・平井・高橋（奈）・梅田・金沢）

(1)遠く桂海に従り、来たりて玉京に返る（遠従桂海、来返玉京）：〈上尚書范陽公啓〉に「遠従桂海、来返玉京」とある。〈上尚書范陽公啓〉は大中三年（849）の作。大中元年、李商隱は鄭畋

に従って桂林に赴き、掌書記となった。大中二年、鄭畋が循州に貶せられると、李商隱はこれには従わず、荊州や洛陽を經由して同年冬には都に戻った。

(2)大中三年(849)の春、李商隱は長安で京兆府の下級役人として臨時にとりたてられた：桂林から都に帰った李商隱は、まず吏部より選ばれて整屋の尉となり、その後、京兆府尹奏署掾曹となる。

(3)〈偶成轉韻七十二句贈四同舍〉：大中四年(850)の作。

(4)〈蟬〉：〈上海辞書出版社《唐詩鑑賞辞典》訳注稿－李商隱篇(2)－〉(《大東文化大学紀要》第32号〈人文科学〉大東文化大学発行・平成6年3月)の〔4〕を参照。

なお、頷聯の大意は次のとおり(中国詩人選集《李商隱》高橋和巳注・岩波書店による)。「夜明け前には、しかしさすがに(蟬たちの)鳴き声もまばらになり、途絶えがちになる。だが、その声が如何にさびしく響こうと、樹は無情に色うす青く立っているに過ぎない。」

(5)李義府：唐、饒陽の人。官は太宗の時、太子舍人・崇賢館学士。高宗の時、吏部尚書に至る。

(6)〈詠烏〉：《全唐詩》卷三十五には「日裏颺朝彩、琴中伴夜啼。上林如許樹、不借一枝栖。」とあり、「如許」に注して「一作多少」とする。

(2007年9月26日受理)